

PRESS RELEASE (2026/09/24)

九州大学伊都キャンパスと糸島市内で新種の甲虫を発見 そっくりな 2 種が同所に生息—博物館標本との比較が新種発見の決め手に

ポイント

- ① 九州大学伊都キャンパスを含む福岡県西部で、外見ではほとんど区別できないハネカクシ科甲虫の新種を発見した。
- ② 新種は、これまで日本で普通種と考えられていた近縁種と同じ場所・同じ環境に生息しており、雄と雌の生殖器の比較によって初めて新種であることが明らかになった。
- ③ 九州大学総合研究博物館に保存されていた標本との比較が、新種の確認に重要な役割を果たし、博物館コレクションが新たな発見を生み出す学術基盤であることを示した。

概要

昆虫には、外見ではほとんど区別できないにもかかわらず、詳しく調べると別種であることが判明する「隠蔽種(※1) (クリプティック・スピーシーズ)」が数多く存在します。そのため、新種を発見するには、精密な形態観察に加え、博物館標本との比較が欠かせません。

九州大学総合研究博物館の丸山宗利准教授、九州大学大学院生物資源環境科学府の大学院生である奥村哲僊(てっさい)氏と橋爪拓斗氏らの研究グループは、九州大学伊都キャンパスおよび糸島市で採集したハネカクシ科甲虫を詳しく調査した結果、新種を発見し、イトセミゾヨツメハネカクシ *Omalium yasuhikoi* と命名しました(科学的な命名は学名のみ)。本種は、日本で広く見られるセミゾヨツメハネカクシ *Omalium japonicum* と極めてよく似ていますが、雄・雌の生殖器の構造には明瞭な違いがあり、独立した種であることが明らかになりました。また詳しく見ると、胸部の形態にも違いが認められました。

本研究のきっかけは、『学研の図鑑 LIVE 昆虫 新版』(2022) の制作に伴う福岡市西部と糸島市での調査でした。その後の追加調査では、九州大学伊都キャンパスでも多数の個体が発見されました。さらに、九州大学総合研究博物館に長年保存されてきた標本との比較研究によって、新種であることが確定しました。今回の成果は、大学キャンパスが貴重な生物多様性の生息地であることを示すとともに、博物館コレクションが新たな発見を支える重要な研究基盤であることを示しています。

本研究成果は 2026 年 9 月 9 日(現地時間)に Zootaxa 誌に掲載されました。

【参考図】



左. 新種イトセミゾヨツメハネカクシ
Omalium yasuhikoi

右. よく似ている既知種のセミゾヨツメハネカクシ
Omalium japonicum

【研究の背景と経緯】

ハネカクシ科は世界で7万種近くが知られる甲虫の一群ですが、小型種が多く、外見だけでは区別できない「隠蔽種（クリプティック・スピーシーズ）」が数多く存在します。そのため、新種を見つけるには詳細な形態比較と博物館標本との照合が欠かせません。

本研究のきっかけは、『学研の図鑑 LIVE 昆虫 新版』（2022）の制作に伴う2020年のフィールド調査でした。丸山宗利准教授らが福岡市西区や糸島市で多数の小型甲虫を採集したところ、その中にセミゾハネカクシ属 *Omalium* の標本が数多く含まれていました。これらの標本を兵庫県在住の在野研究家、故・林靖彦氏に見ていただいたところ、「よく知られた *Omalium japonicum* セミゾヨツメハネカクシによく似ているが、その中に未記載種が含まれている可能性が高い」との指摘を受けました。

その後、研究グループは追加調査を実施し、九州大学伊都キャンパスを含む福岡市西部や糸島市で多数の標本を採集しました。さらに、近年の参考論文や九州大学総合研究博物館に保存されていた比較標本を詳細に比較・検討した結果、これまで見過ごされてきた新種であることが明らかになりました。

【研究の内容と成果】

新種はイトセミゾヨツメハネカクシ *Omalium yasuhikoi* と名づけられました。和名は伊都キャンパスと糸島市に、学名は林靖彦氏にちなんでいます。本種は体長約3mmの小型種で、外見はセミゾヨツメハネカクシ *Omalium japonicum* とほぼ同じです。しかし雄交尾器と雌生殖器には大きな違いがあり、これらが生殖隔離を担っている可能性が示されました。

興味深いことに、新種と近縁種は同じ場所、同じ時期、同じ環境から常に一緒に採集されました。伊都キャンパスや糸島市の水田地帯でも多数の個体が確認されており、大学キャンパスや水田地帯のような緑地が貴重な生物多様性の保全・研究の場となっていることも再認識されました。

また、本研究では近年採集された多数の標本だけでなく、博物館標本との比較によって既知種との違いを確認することができました。博物館コレクションは、過去の生物相を記録するだけでなく、新種発見を支える研究基盤として重要な役割を果たしていることが改めて示されました。

【今後の展開】

本種は現在のところ福岡県でのみ確認されています。しかし、本種は日本で広く分布するセミゾヨツメハネカクシ *Omalium japonicum* と外見が極めてよく似ており、これまで同種として見過ごされてきた可能性があります。今後、全国各地で保存されている博物館標本や新たな採集標本を詳細に調査することで、本種の正確な分布域が明らかになることが期待されます。

また、本種とセミゾヨツメハネカクシ *Omalium japonicum* は同じ場所、同じ時期、同じ環境で生活しているにもかかわらず、互いに独立した種として存在しています。両種で大きく異なる雄・雌の生殖器の形態は、生殖隔離(※2)の仕組みや新種が生まれる過程（種分化）の理解につながる重要な研究材料になると考えられます。今後は分子系統解析や行動観察などを組み合わせることで、両種がどのように進化し、共存するようになったのかを明らかにしたいと考えています。

さらに、本研究は、大学キャンパスや水田地帯などの身近な環境にも、まだ発見されていない生物が数多く生息している可能性を示しました。加えて、九州大学総合研究博物館に長年保存されてきた標本が、新種の発見とその確認に重要な役割を果たしました。博物館標本は過去の生物相を記録する「知のアーカイブ」であるだけでなく、新たな科学的発見を生み出す研究基盤でもあります。本研究は、継続的な野外調査と博物館コレクションを組み合わせることの重要性を示す成果であり、今後も九州大学総合研究博物館が保有する標本群を活用することで、日本の昆虫相のさらなる解明につながることを期待されます。

九州大学総合研究博物館では現在、約 176 万点に及ぶ標本を未来へ引き継ぐため、寄附金事業「**標本整備・保存・活用プロジェクトー発見を生むコレクションを、次の 100 年へー**」を進めています。本研究は、長年にわたり収集・保存されてきた標本が、新たな発見を支える重要な学術資源であることを示す好例であり、標本を適切に保存・活用し次世代へ継承していくことの重要性を改めて示しています。
https://kikin.kyushu-u.ac.jp/info/news/view.php?page=1&r_search=&r_division=0&cld=2432

【用語解説】

(※1) 隠蔽種

外見が非常によく似ていて区別が難しいが、遺伝的・生殖的には異なる別種。

(※2) 生殖隔離

異なる集団の間で交配が起こらない、または交配しても繁殖可能な子孫を残せない状態。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 JP19H03285 及び JP24KJ1811 の助成を受けたものです。

【論文情報】

掲載誌：Zootaxa

タイトル：**A new species of *Omalium* Gravenhorst, 1802 (Coleoptera: Staphylinidae: Omaliinae) closely resembling *O. japonicum* Sharp, 1874, discovered in sympatry in Kyushu, Japan**

【邦訳：日本・九州で同所的に発見された、セミゾヨツメハネカクシ (*Omalium japonicum*) に酷似するセミゾヨツメハネカクシ属 (*Omalium*) の新種】

著者名：丸山宗利・奥村哲僊・橋爪拓斗

D O I : 10.11646/zootaxa.5875.6.4

【お問合せ先】

<研究に関すること>

九州大学総合研究博物館 准教授 丸山宗利 (マルヤマムネトシ)

TEL : 092-642-4252 FAX : 092-642-4299

Mail : dendrolasius@gmail.com

<報道に関すること>

九州大学 広報課

TEL : 092-802-2130 FAX : 092-802-2139

Mail : koho@jimu.kyushu-u.ac.jp